

## あ と が き

今まで公開した文章をいくつか集めた。分類するとおおよそ以下のとおり。

過去の清末小説研究に関する概括、雑誌『繡像小説』、商務版「説部叢書」、翻訳あるいは漢訳シェイクスピア関係などを緩やかにまとめる。

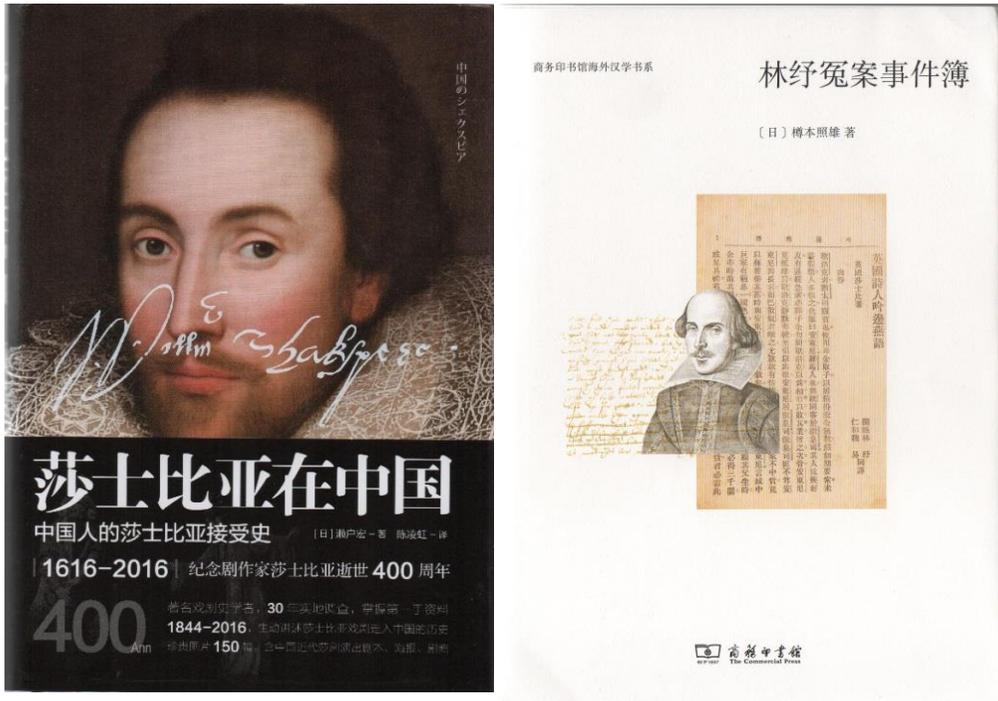
日本における清末小説研究を振り返ったのは1991年だ。加筆して2000年くらいまでの状況説明だと考えてほしい。それ以降については古二徳論文（英語）を紹介しておいた。私個人の研究について述べたところは以前の文章と重複する部分がある。ご了解ください。

重複といえば『繡像小説』、「説部叢書」、漢訳莎氏関係などについては同じ主張をくり返している。それは私の関心の持ち方が深く、同時に持続度が強いという意味だ。そうするだけの価値を有する研究課題だということもできる。

私は現在、文章の発表場所を主としてウェブサイトには置いている。清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp> にほとんど全部の論文、論文集、小説目録を収納する。公開中の季刊誌『清末小説から』を含めて誰でもがネットを利用して文献ファイルのダウンロードができる状態だ。実際に閲覧されている。

ただし読者からの具体的な反応はそれほど多くはない。清末民初小説の研究分野ではそれが常態であり普通のことなのだ。研究者が少ないから読者も限られてくる。注目を引かない。慣れている。

ところが本書に収録したある文章については違った。その中で言及した研究者のひとりから自筆による丁寧な、かつ長文のお手紙をいただいた。日本語で書いてある。ネット上の私の論文がたしかに読まれているという証拠だ。ありがたいことだと思った。たまにはそういうこともあるというささやかな喜びだ。



林纾訳シェイクスピアを含む書籍が漢訳刊行された（上図の左）。該部分について私はアマゾン（亜馬遜）中国の買家評論（カスタマーレビュー）に漢語の短文を投稿した。該文は現在も読むことができる。小さな反応があった。

2017年8月に北京の商務印書館で創立120周年を記念する国際学会が開催された。『澎湃新聞』の記者がそれに参加してアマゾン中国に該書評があることを知ったらしい。董牧杭が長い紹介文「日本知名学者為何到中国亞馬遜來謾罵同行？」（『澎湃新聞』ウェブサイト2017.8.16）を發表した。研究に国境があるという奇妙な思考が題名にあらわれている。学術研究とは関係のない文章だ。董の文章に釣られてアマゾン中国の該当欄に投稿する中国人が3名いた。私が真摯に力を込めて書いた漢語文章を冷やかすだけの傍觀者にすぎない。

ついでながら一言。アマゾン中国に投稿した漢語原稿には元になった日本語の文章がある。2017年3月からアマゾン日本に掲載されていた。読者書評は長い間私のその1件より増えることはなかった。ある時気づくとそれが消えている。理由は知らない。誰かがアマゾン日本に削除依頼をしたのだろう。2018年に同

文を再度投稿して掲載される。だがこれもすぐに消されてしまった。現在は消去されたままになっている。そういう状況である。

アマゾン日本に再度掲載された様子は画像データで保存していた。そのままを清末小説研究会ウェブサイト（2018.5.7付）に掲げている。文章そのものは念のため本書にも収録した。

デジタル情報は一度公開されると複製物が残る。公開を妨害しようと考えてもそれは失敗する。自分にとって不都合なものだからといって抹消隠蔽することは結局のところ不可能である。これがネット社会の現実だ。

林訳といえばもうひとつ漢訳本が出た。（日）樽本照雄著、李艶麗訳『林紓冤案事件簿』（商務印書館2018）という。日本で刊行された『林紓冤罪事件簿』（清末小説研究会2008）を底本とする。日本語の「冤罪」が漢語では「冤案」になった。ある中国人研究者は「商務印書館海外漢学書系」シリーズに収録されたのは最適だといってくれた。恐縮です。

正直なところ拙著の漢訳本が実際に刊行されたことに私自身が驚いた。出版される可能性はないと考えていたからだ。その理由を述べる。

林紓あるいは林訳にまつわる中国学界の動向が背景にある。1980年ころまでは林紓批判一辺倒であった。今は一部分に林紓再評価らしい動きがたしかに見える。林紓関係の論文を読んでいて微妙に変化しているように感じる。しかしその基本はやはり林紓批判で一貫しており動かない。

林紓は原作の戯曲を小説にかえて翻訳した、戯曲と小説の区別がつかないと主張する「区別がつかない論」が根をはっている。林紓を批判する根拠のひとつだ。以前は常套句のように使われた。だが本書に収録した「2014年の林紓評価」と「翻訳家としての林紓」を見てほしい。その有名な語句が中国人研究者の現在の論文には出てこない。その徹底していることがかえって問題の大きさを私たちに教えてくれる。ゆえにそれを「立入禁止区域」と表現した。実在していることはわかっているが誰も踏み込まない。まるでどこかから指令が出ているかのようだ。

表面にあらわれないにしても「区別がつかない論」を根底で信奉している限り根本的かつ全面的な林紓再評価はできない。いままでの中国学界はそうであったと私は理解する。

私は林紘個人とその訳業を自分なりに検討した。新しい資料を提出して林紘批判に利用される「区別がつかない論」は虚偽だと立証したとおりだ。結論として拙著は林紘を全面的に肯定する内容になった。

「冤罪事件」という書名からそれがわかるだろう。林紘にかぶせられたのは無実の罪である。根拠を提示したうえで明らかにした。中国学界における林紘批判、林訳批判を基本から覆す。従来は存在しなかった視点で書いている。

中国学界が判定しているものとは逆の見解を表明したのだ。私がいくら「林紘冤罪事件」だと指摘しても見る目、聞く耳を持たない。中国学界の主流とは意見を異にする拙著の漢訳本は刊行されないだろうとの予測につながる。

日本では拙著に言及した人はほとんどいなかった。考えれば当然のことだ。もし賛同の意を表すればその評者の師匠筋、指導教授、先輩同輩後輩研究者を否定することになる（ここは過去の研究者全員が間違っていたという婉曲表現）。かといって事実に基づいて林訳批判を否定している拙著を非難することもできない。非難すれば評者自身の無知をさらすことになるからだ。残された道はひとつしかない。拙著の存在を無視する。発言しない。これが研究者としての自分を安全な場所に避難させる最良の方法である。

例外はどこにもある。瀬戸博士だ。新出資料など眼中にない。わざわざ出てきて従来からの批判路線を堅持しつつ以前を上回って林紘を非難した。沈黙するという賢明な選択肢があったにもかかわらずだ。瀬戸博士にとって林紘批判は確信であることがわかる。

瀬戸博士が行なっている林紘批判について私が何度も取り上げる理由を述べる。瀬戸博士の林紘批判はすでに研究の範囲を超えているからだ。林紘に対して人身攻撃を実行した。根拠のない誹謗、すなわち中傷なのだ。林紘本人の人権を蹂躪しているといわざるをえない。研究界から足を踏み外した。私はそれを指して「林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する瀬戸博士」と表現している。

瀬戸博士の文章からは清朝末期から中華民国初期を生きた中国の知識人に対する敬意というものを感ずることができない。以前、ある研究発表会で多くの参加者を前にして瀬戸博士にむかってご忠告もうしあげた。少し大きめの声を出したからその場の空気は凍りついた。瀬戸博士にはまったくご理解いただけなかった

ようだ。

瀬戸博士は私が書く漢訳莎劇関係の文章において出番が多い。本書未収ではあるが『清末小説から』に連載した「自爆する日中の研究者たち」にも出演してもらっている。中国の著名で研究の権威である阿英とも同席し共演するのだ。怪挙である。

瀬戸博士は反対するために反対してその結果は自爆である。自爆の原因は明白だ。林紓を批判するという結論が先にある。1910年代からの文学革命派、すなわち現在の中国学界主流派による根拠のない見解を瀬戸博士は強く支持している。林紓を批判し続ける理由だ。日本にいる瀬戸博士が中国学界の公式見解をくり返すことにはいかなる意味と意義があるというのであろう。事大することがそれほど誇らしいことなのだろうか。疑問に思う。

『林紓冤案事件簿』にもどる。

2013年に出版社と契約書を交わして数年が経過していた。どこからか出版計画を知ったある中国人研究者が、刊行されないのであれば別の出版社を紹介すると提案してくれたことがある。それほど親切な人は珍しい。契約書はあるが「ただの紙切れにすぎない」と言い出しかねないのが中国の組織だ。出版については不確かで不安定な状態があった。

いうまでもなく中国の学界、出版界ともに管理されている。中国学界の影響を受けていることとは別に、日本では何をどのように研究しても基本的に自由だ。表現する媒体も多様にある。日本で『林紓冤罪事件簿』は出た。しかし状況が基本的に違う中国では林紓批判が続くかぎり拙著の漢訳出版はむつかしいだろう。普通にそう考える。

「毒草」という言葉が中華人民共和国のある時期に使われたことがある。批判の対象となった人物の作品について閲覧を禁止した。再版することもあらたに出版することもない。図書館所蔵の作品は図書カードを抜いて閲覧不可にした。所蔵されていても借り出すことはできない。作品を読まずに批判しろという基本方針である。林紓を手元に置かずに林紓批判が実行されたということだ。

ところが林紓についての風向きが変わってきた。林紓批判路線を維持実行していた出版界に小さな変化が起こったのは1980年代からだ。『林紓小説叢書』（商

務印書館1981)である。200種をこえる林訳小説の中から10種を選び出して復刻した。林訳のほとんどは商務印書館から刊行された歴史がある。1981年の復刻版が商務印書館から刊行されたのもそういう経緯があったからだろう。

1981年の『林訳小説叢書』刊行は研究解禁の合図だったことになるだろう。作品集だけでも複数が出版された。『林紵選集』(四川人民出版社1985-88)さらに『林紵翻訳小説未刊九種』(福建人民出版社1994)が出た。1981年の『林訳小説叢書』を再度復刻したのが『林紵訳書経典』(上海世紀出版股份公司2013)である。

これは、と目を見張る出版広告を最近見かけた。『林紵訳文全集』全47冊(上海書店出版社2018)だ。購入して今私の手元にある。

1981年から林紵研究と林訳研究の専門書も多数が出版されている。さらにはこの数年間に林紵の名前を冠した国内学会(研究会)、国際学会が複数回開催された。批判大会でないことが重要だ。これも林紵に対する見方が変更されつつあることを示しているのかもしれない。従来の評価を変更するばあい、研究者に広く告知するにはこの種の学会開催が有効であるという判断だと思う。

以上に見る一連の出版、学会活動は研究に影響を及ぼさないはずがない。というよりも上級が林紵批判を見直す方向に舵を切る予兆のようにも見える。それが林紵学会開催と『林紵訳文全集』の刊行にあらわれているのではなかろうか。拙著の漢訳が商務印書館そのものから刊行されたことはその軌道上にあるように思わないでもない。あくまでも推測の域をでないことを申し添える。

本格的な見直しとなれば当然のように今後の問題が発生する。林紵批判を弱めるにしても主流をなした批判者たちについてはどう扱うのか。銭玄同と劉半農はじめ、胡適、鄭振鐸、阿英までが直接に関係している。背後には蔡元培、陳独秀、魯迅、周作人らが控えている。魯迅は林紵のことを「ファシスト」と罵った。彼ら著名な批判者たちをそのままにして林紵を再評価することはできない。研究上の常識だろう。

林紵批判に関して中国学界は難しい局面に直面している。その動向に今後も注目していきたい。念のために言っておくが、中国学界の動向といってもそれだけのこと。私の研究とは基本的に無関係だ。

樽本照雄